

# 1 た・づ・な

## 「生産・育成の現場を眺めて」

社団法人  
日本軽種馬協会副会長

西村 啓二



日本軽種馬協会（以下 JBBA）に来てから一年が経ちました。JBBA の事業の現状をご説明し、またわずかな経験ではありますが、この一年で感じたこと、考えたことを少しお話ししようと思います。

JBBA は、ご存知のように日本の軽種馬生産者の集まりです。会員の会費のほか、日本中央競馬会や地方競馬全国協会などから助成金をいただいて、軽種馬生産の下支えをしています。それが延いては日本の競馬の隆盛につながることを願いつつ、業務にあたっています。

JBBA の業務の範囲は多岐にわたりますが、主なものは、

種牡馬を繋養し、種付け事業を実施すること

基金を活用して、「せり」の開催などに対し、幅広い支援を行うこと

インターネットなどを通じ、生産と競馬に関する情報を生産地・競馬サークル・競馬ファン等に提供すること

があげられます。

その他にも先駆的な取組みをしようとする生産者・育成者には施設改善経費を、競走馬の資質の改善を図るために新たな繁殖牝馬を導入しようとする生産者には、導入・輸送の経費を補助するなどしています。生産地の防疫対策、生産・育成技術の向上を図るための指導研修事業など、ここではそのすべてを書ききれません。

まず、種牡馬事業に関することですが、平成 21 年度に全国で供用されたサラ系種牡馬は 262 頭、これは最も多かった平成 3, 4 年の半分以下です。200 頭を優に超える多頭数種付けが当たり前のようになり、特定の種牡馬に種付けが集中するようになった結果、種付けが年に数頭といった種牡馬は仕方なく引退となります。市場などで「売れる馬」を追い求める生産者の立場からは、これもやむを得ないことかもしれません。ただこういう状況が長く続き、似通った血統の馬が増えていけば、そのうち配合に支障がでてくるのは自明の理です。JBBA としては、力が足りない部分があることは承知のうえで、「血」の多様性を維持できるよう、各国から様々な血統背景を持った種牡馬を導入すべく努力をしています。確かに、生産者の方々からはあまり目を向けていただけない種牡馬もありますが、そういう意図で多様な種牡馬をいれているんだということをご理解いただければと思います。また、優良な繁殖牝馬を導入する場合の助成も実施していますので、海外・国内を問わず、ご自身がこれと思った牝馬を手に入れることを考えていただきたいと思います。今更言うようなことでもありませんが・・・。

次に、この10年ほどで数段の飛躍を遂げた育成についてです。軽種馬育成調教センター（以下 BTC）の調教施設がオープンしたのは平成5年。まだまだ、育成という概念もそれほど浸透していなかったように思います。BTC の周辺に施設利用のための厩舎が増え始め、育成専門ともいえる方々が現れ、最近ではコンサイナーという職種もごく当たり前ととらえられるようになりました。

せり市場を見ますと、昨年は2歳のトレーニングセールが注目を浴びました。リスクの少ない2歳セールは欧米だけのものではなく、今後は日本でも主流となっていく気配です。製造業では自分の製品にいかにか付加価値を付けることができるかが、その企業の生き残りのポイントであることは今や誰もが認めるところとなっています。飛びぬけた血統の馬を除けば、製品ともいえる生産馬に育成を通じて、またコンサイナーの手で、いかに購買者の気をひく要素を加えられるかが売却と売却価格に大きな影響を与えるということです。ピンフッカーやコンサイナーという業務、現在はそれ専門の業者がいるというところまではいっていませんが、付加価値を付けて売るという考え方が浸透すれば、早晚わが国にも根を下ろすのではないかと思います。

今は、競馬にとっても生産にとっても大きな岐路にさしかかっているというところ。馬に携わる人すべての意識改革が必要とされているのではないのでしょうか。